The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語形成における語彙意味素性の役割
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 59-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84975
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語形成における語彙意味素性の役割*

由本陽子

1. はじめに

語彙意味論においては、統語範疇（品詞）、項構造に加えて、より語彙意味を反映するものとして、語彙概念構造 （Lexical Conceptual Structure, 以下 LCS）や種々の意味素性（たとえば、[±abstract], [±bounded], [±gradable]）などが、様々な統語現象に影響を与える語彙情報として、分析に用いられてきたが、語構造や語形成においても、これらの語彙情報は非常に重要な役割を果たすものである。特に、新たな語彙素（lexeme）を作り出す接辞付加や複合においては、語彙意味情報がその適用条件として必須だと言ってよいであろう。近年、その語彙意味情報として、新たに注目されているのが、クオリア構造である。以前は語用論の領域に関わる周辺的な情報としか見なされていなかったような百科事典的知識が、クオリア構造という形で形式化されたことによって、意味論的情報として有効な道具立てとなることが明らかになってきたのである。本稿では、語形成論において、意味素性やクオリア構造が果たしている役割について整理し、これらの語彙意味情報は、語の構造や意味解釈に重要な役割を果たすものであるが、それに加えて、語形成規則の適用条件に関わる情報として必要なものであり、特にクオリア構造は、語形成規則の規定においてもなくてはならない情報であることを示す。

2. 項構造と LCS によって記述される語形成規則における語彙意味情報の役割

語形成規則を記述するには、様々な語彙情報が必要である。まず、接辞付加に関しては、付加される基体と形成される派生語両方の範疇素性は重要な情報であり、Lieber (2010)では(1)のような記述がなされている。統語的な語彙情報としては、項構造も重要であり、特に動詞が関わる語形成について、1980 年代には、項構造がどのように変更されるかを記述することで語形成規則を規定する分析が多く提案された。たとえば、(2)のように Williams (1981)によれば、*-able* 接辞付加は概ね基体の外項を内項に変更し、代わりに Theme (Th)を外項化する (externalize=E) 操作として捉えられるとされた。

(1) a. Rule for *-ness*: *-ness* attaches to <u>adjectives</u> ‘X’ and produces <u>noun</u> meaning ‘the quality of ‘X’

b. Rule for *un-*: *un-* attaches to <u>adjectives</u> meaning ‘X’ and produces <u>adjectives</u> meaning

* 本稿は，2020 年度科学研究費補助金基盤研究（B）(17H0234)）の助成を受けた研究成果の一部である。

'not X'; *un-* attaches to verbs meaning 'X' and produces verbs meaning 'reverse the action X'.

(Lieber 2010:35 下線は筆者による)

(2) a. E (Th): read (A, Th) → readable (A, Th)

b. E (X) : erase the underline on the external argument, if there is one, and underline X.

(Williams 1981: 92-93)

ここで注意せねばならないのは、(2)で用いられている「項構造」には意味役割の情報が含まれていることである。すなわち、(2a)のような規則においては、純粋な形態統語的情報のみではなく、基体の意味情報も利用されていると言える。意味役割は、動詞の意味構造、すなわち LCS が基盤となっている概念であるから、(2a)の規則の適用条件の照合には基体動詞の LCS を参照することが不可欠だということになる。ただ、*-able* 接辞付加規則においては、基体動詞の目的語にあたる Theme 項が、外項として受け継がれるという点が重要であり、この点を一般化することが可能であるので、(2a)のような記述に一定の妥当性があることは間違いない。しかし、新たな語彙素を作る語形成規則においては、インプットとアウトプットでどのように意味が変わるかが重要な情報であり、また、適用の条件が基体動詞のより詳細な意味素性によって規定されることも多くなる。また、動詞への接辞付加によって新たな動詞を形成する場合、項構造では一般化を捉えることができない語形成規則も多い。わかりやすい例として、*over*-接辞付加規則について見ておこう。

(3) a. flow over the banks / overflow the banks

b. sleep exceeding the fixed time / oversleep the fixed time

c. shoot the gun over the target / overshoot the target (*overshoot the gun)

d. draw money from the account / overdraw one's account (*overdraw the money)

e. simplify the rule / oversimplify the rule

f. drink too much alcohol / overdrink oneself (由本 2005)

動詞に付加される接頭辞 *over*-については、(3a)(3b)のように、基体が自動詞の場合、他動詞に変化させるが、(3c)-(3f)に見るように、基体が他動詞の場合は自他に変更がないので、形態統語的側面において捉えることができる一般化としては、アウトプットが他動詞になるということしかない。ただし、(3c)-(3f)をよく見ると、目的語の選択素性においては、一律ではないことがわかる。(3c)(3d)は、*over*-が付加されることにより、基体が選択する目的語を選択できなくなり、代わりに基体が前置詞を介して共起する名詞を目的語として選択する他動詞になることを示している。いっぽう、(3e)では、選択素性にまったく変更がない。(3f)では、再帰代名詞を目的語にとる動詞が派生されている。このように基体動詞によって、範疇素性や選択素性に及ぼす影響が一律ではない語形成は、項構造によって一般化するこ

とは困難である。しかし、動詞の意味構造に焦点をあてて考えれば、(3)に示すような、一見基体に異なる変更を与えているようにみえる *over*-にも共通点があることがわかってくる。由本(2005: 82)では、このような共通点をとらえるために、*over*-接辞付加の規則を以下のように LCS を用いて記述することを提案した。

(4) a. V: [...[[x] GO [$_{Path}$...[$_{Place}$... P[y]]]]] →
[$_V$ over-V] : [...[[x] GO [$_{Path}$ TO [$_{Place}$ OVER [y]]]]]
b. V: [...[BECOME [[y] BE [$_{Place}$ P [y]]]]] →
[$_V$ over-V] : [...[BECOME [[y] BE [$_{Place}$ OVER [y]]]]]

すなわち、*over*-接辞付加は、(4a)のように、移動を表す動詞につくか、あるいは、(4b)のように状態変化を含意する動詞につき、基体に与える影響は、LCS 内の結果状態を表す部分（すなわち、着点に相当する Place）に過剰の意味を表す OVER を挿入する規則として一般化できるということである。この規則に従って、*overflow, overshoot, oversimplify* の LCS を記述すると、それぞれ(5a)(5b)(5c)のようになる。

(5) a. x overflow y : [[x] GO [$_{Path}$ TO [$_{Place}$ OVER [y]]]]
b. x overshoot y : [[x] CAUSE [[ARROW] GO [$_{Path}$ TO [$_{Place}$ OVER [y]]]]]
c. x oversimplify y : [[x] CAUSE [BECOME [[y] BE$_{Ident}$ [$_{Place}$ OVER [SIMPLE]]]]]

基体が物理的移動を含む *overflow* や *overshoot* のような場合は、結果状態はまさに着地点を表し、*over*-の付加によって表されているのは、その着点を越えた地点まで到達することである。基体動詞においては、着点を表すには、前置詞が必要であったものが、OVER が挿入されたことによって前置詞要素は語彙化（語彙的充足）され、変項 y は目的語として表されることになる。いっぽう、*oversimplify* のように、基体が状態変化を含意する動詞の場合も、OVER は、LCS 上(5a)(5b)と同じ位置に挿入されているが、着点には結果状態を表す定項（(5c)では SIMPLE）が与えられており、したがって、その状態が過剰であることを表し、選択素性には何の影響も与えない。このように、基体の意味を大きく変更する派生については、LCS を用いた記述は、意味と統語の両面を説明するものとして有効である。

しかし、上記のような LCS による *over*-接辞付加の分析では、1 点記述しきれていない部分がある。それは、(5c)のような状態変化を含意する基体に付加される場合、結果状態は段階性のある属性概念でなければならないということである。たとえば、状態変化動詞でも、(6)のように段階性が想定されない結果を含意する動詞には、*over*-を付加することができない。

(6) a. She has {realized / ??over-realized} a long-term dream.

b. They {vacated / *over-vacated the house}.

c. This winter the water pipe {froze / *over-froze} frequently.

*over-*が過剰を表す接頭辞であることから、このことは直感的には理解できるが、接辞付加規則に関わる意味制約として記述するのは、そう簡単ではない。形容詞の段階性については、Kennedy (1999)、Kennedy and McNally (2005)に代表されるスケール性に関する研究により、近年多くのことが明らかになってきている。しかし、動詞の意味素性として「スケール」をどのように位置づけるかについては、明確な分析はなされていない。たとえば、*oversimplify* においては、*over-*接辞付加規則で要求されるのは、含意される結果状態を表す属性概念の段階性であるが、*overeat, overwork* や *overload* などにおいては、動詞の LCS 内に形容詞に対応するような意義素は想定されておらず、段階性の制約は、食べる量や労働時間の長さ、積み荷の量に大小が想定できることによって満たされているのである。スケール理論においても、何を基準としてスケールが設定されるかは、文脈や世界知識に拠るところが大きいのであって[1]、同じ *open* で表される「開いている」状態であっても、それが店についての叙述か、ドアや窓について叙述なのかによって、段階性の有無が違ってくるというのは、よく指摘される事実である（cf. ??The restaurant was {half/ completely} open. / The door was {half / completely} open.）。動詞の表す事象に関するスケールについても同様のことが言えるだろう。したがって、*over-*接辞付加のように、基体の意味に影響を与えるような語形成については、結局のところ、その適用条件を明確に記述するには、LCS だけでなく、百科事典的知識を基盤とするクオリア構造にも言及する必要があると考えられる。形容詞のクオリア構造については、どのような情報をどの役割に記載するのか、特に段階性をどのように表すかについては、管見の限り定説はなく、今後の課題としたいが、ここでは、語形成規則の適用条件の記述には、クオリア構造への言及が不可欠であることを述べておきたい。

次に、接尾辞-*ize* について見てみよう。[2]この接尾辞は、名詞または形容詞に付加され動詞を形成する接辞の中でも、格段に生産性が高い。Lieber (2010)では、-*ize* 接辞付加を(7)のように記述している。まず太字の部分が、統語範疇の制約、下線部が、音韻的制約である。意味については、波線がつけられた部分に記述されており、大半の-*ize* 派生語と基体 X との関係はこのように「X にする」と「X に入れる」のように規定できる。

(7) Rule for -*ize* : -*ize* attaches to **adjectives or nouns** <u>of two or more syllables where the final syllable does not bear primary stress</u>. For a base 'X' it produces <u>verbs that mean 'make / put into X'</u>. (Lieber 2010:37　太字、下線は筆者)

前者の意味を表すものには(8a)のような例があり、基体が形容詞の場合は、この意味にな

[1] cf. 三原（2009）

[2] cf. Huddleston and Pullum (2002: 1715), 影山（1999: 177-178).

る。基体が名詞の場合は、何かを名詞が表すもの（*colonize* なら colony）にすることを意味する。[3]これに対して、(8b)に挙げた例が 'put into X'の意味を表すものに該当するもので、*hospitalize* はまさに「病院に入れる」ことを表すのでわかりやすいが、必ずしも物理的な位置変化を表すものに限られるのではなく、たとえば、*itemize* は「～を項目に分けてそこに書き入れる」、*epitomize* は「～を概要という形に書き直す」というように抽象的な意味を表すので、前者との区別がわかりにくい。しかし、前者では、X *colonized* Y は Y is a colony を含意するという関係が成り立つが、後者では、X *hospitalized* Y から Y is a hospital は含意されないという明確な違いがある。また、(8c)の例からもわかるように、*-ize* 派生動詞の意味は、これだけではカバーできず、「～を与える、送る」のような意味を表す例も多い。

(8) a. legalize,（合法化する）, familiarize（親しませる）, idolize（偶像化する）, colonize（植民地化する）civilianize（一般市民にする）
(cf. X colonized Y. ⇒ Y is a colony.)
b. hospitalize（入院する）, epitomize（抜粋を作る）, itemize（項目に分ける）standardize （標準化する） (cf. X epitomized Y. ⇏ Y is an epitome.)
c. apologize（詫びを言う）, colorize（白黒映画などに色をつける）, hypnotize（催眠術をかける）, militarize（軍備を整える）

影山 (1999: 177-178)は、この 3 種の意味を Lieber (1988)に基づき以下のような LCS で表している。太字で表した部分に、基体の形容詞または名詞が表す概念が代入されて、*-ize* 動詞の LCS が形成されるのである。

(9) a. [ ]$_x$ CAUSE [BECOME [[ ]$_y$ BE AT-[**NOUN/ADJECTIVE**]$_z$]]
b. [ ]$_x$ CAUSE [[ ]$_y$ MOVE TO-[**NOUN**]$_z$]
c. [ ]$_x$ CAUSE [[**NOUN**]$_y$ MOVE TO/ON/IN-[ ]$_z$]]

(9b)は移動を表す関数 MOVE で表されており、(8b)のタイプには位置変化として分析したほうがよさそうなものもあるので検討の余地があるのだが、先述の(9a)の状態変化動詞とは異なる含意を説明するには有効かもしれない。(9c)は基体名詞が表すものが目的語(z)に与えられることを表すものである。*apologize* について、影山 (ibid.: 178)は、(9c)の LCS を想定する説明として、「She apologized to him.という文は「彼女が、APOLOGY が彼に届くようにする」という」意味を表していると述べている。この 3 種の LCS は、より一般的なスキーマに統一することが難しく、*-ize* 接辞付加規則の記述は一本化できないように思われる。

---

[3] 影山(1996: 166-168)によれば、*-ize* による派生動詞は、原則他動詞であり、自他両用のものは、他動詞から自動詞に転換したものであると考えられるので、ここでは他動詞の意味のみを記載している。

ここで、問題にしたいのは、このように、*-ize* 接尾辞付加規則が、複数の意味構造によって表す必要があるとすれば、(形容詞については、(9a)が適用されるという一般化ができたとしても)、ある名詞に*-ize* を付加して作られる動詞がどのような意味になるのか、つまり、それぞれの基体が(9)のうちどの LCS に代入されて派生動詞を作るのかについては、先行研究では明らかにされていないことである。基体が名詞か形容詞か、という範疇素性も決定要因にはなるが、それだけでは予測ができないのである。これでは、単に*-ize* 動詞の意味を記述しているにすぎず、*-ize* 接辞付加規則としては不十分なものと言わざるを得ない。

(9)のうちどの規則が適用されるかを決定する要因は、基体の意味情報に求めるしかないと考えられる。そこで、名詞の意味をクオリア構造によって記述することを想定して、各タイプについて考えてみよう。まず、(9a)のタイプを形成する基体名詞は、形容詞に準ずる属性や身分を表すものだと考えられる。「植民地 (colony)」というのは、特定の状態にある領土を表すものであり、「偶像 (idol)」はあこがれや信仰の対象になっている状態のものを表す。このような名詞の性質は、形式役割において、単純に具体物を指示対象とする名詞とは区別できるだろう。[4]次に、(9b)のタイプを形成するものには、まず、「病院 (hospital)」のように、容器や何かを収容する目的の機関を表す名詞がある。これは、目的役割において示される情報であろう。それ以外に、「抜粋 (epitome)（＝物語や報告などのあらまし」や「項目 (item)（＝物事をある基準で区分けした個々のもの)」のように、特定の物体に対して何らかの行為を行った結果得られるものを表す名詞が基体となる場合も、この LCS が適用される。このような情報は、クオリア構造では、主体役割によって示すことができる。これに対して(9c)のタイプを形成する名詞は、「詫び (apology)」や「催眠術 (hypnosis)」のように、それを向ける対象が想定された概念や、「色 (color)」や「軍隊 (military)」のように、何らかの物体と部分-全体の関係が想定されている概念を表すものである。[5]前者については、目的役割に記載される情報において対象の含意を示すことができ、また、後者の部分-全体関係は構成役割によって示すことができるだろう。以上の観察は、まったく形式化には至っていないものであるが、*-ize* 接辞付加規則によって形成される動詞の意味を予測可能なものにするには、基体名詞のクオリア構造への言及が不可欠であることを示している。

以上、この節では、先行研究では、項構造や LCS を用いて記述されてきた語形成規則について、語彙意味情報、なかでもクオリア構造を用いて記述された情報に言及しなければ、規則が適用される条件や、形成される語の統語的・意味的性質を十分に記述することができない場合があることを示した。次の節では、クオリア構造によってしか記述ができない語形成規則もあることを述べる。

---

[4] あるいは、構成役割において、その名詞を構成する性質としてそういった情報を表すことも考えられるかもしれない。この点については今後の課題とする。

[5] 軍隊は、通常、国家など政治的組織に属するものと認識されているとすれば、いわゆる非飽和名詞の一種と言えるだろう。

3. クオリア構造によって記述すべき語形成

前節では、*over*-接辞付加の適用条件に基体動詞の意味に段階性が関わっており、百科事典的知識も含んだ意味素性への言及が必要となること、また、*-ize* 接辞付加については、複数の LCS で規定されている規則のうちどれが選ばれるかにおいて、基体名詞のクオリア構造が手掛かりを与えることを見た。この節では、語形成規則の記述自体がクオリア構造によって形式化された意味情報を用いなければ不可能である例として、名詞からの転換動詞を見ておきたい。

英語の名詞からの転換による動詞形成は非常に生産性が高いことはよく知られている。基体となる名詞は多種多様で、作られる動詞の性質も様々である。(10)に示すように、とる項の数も、項の種類も、また、意味クラスも一律ではない。(10a,b)のような働きかけを表す他動詞、(10c)のように前置詞句補部をとる位置変化動詞、(10d)のような二重目的語構文にも現れ得る授受動詞、(10e)のように起点や着点と共起する移動動詞など、あらゆるタイプの動詞が作られるのである。大半が他動詞だが、(10e)の例や、天候を表す名詞を基体とする *rain, snow* など、また、期間を表す名詞を基体とする *summer* (*in Paris*)（パリで夏を過ごす）、*weekend* (*at the seaside*)（海辺で週末を過ごす）のように、自動詞になる場合もある。さらに一般化を難しくする事実として、位置変化を表す動詞を作る場合でも、(10c)の *pin* が典型的な位置変化動詞同様、着点を表す前置詞句補部をとるのに対して、(10f)の *bottle* は前置詞句補部をとらない。このように、名詞転換動詞の統語的・意味的性質は、実に多様であり、統語範疇が V であるものを形成するという以外、この語形成を規則として記述することは非常に困難に思われる。

(10) a. John mopped the floor.（ジョンは床をモップで拭いた）
b. Bill hammered the nail into the wall.（ビルは釘をハンマーで壁に打ち込んだ）
c. Mary pinned a corsage on the hat.（メアリはコサージュをピンで帽子に留めた）
d. Fax the document to me. / Fax me the document.
（書類をファックスで送ってください）
e. You can bus to school from the station.（駅からバスで学校に行けます）
f. Mother bottled marmalade.（おかあさんはマーマレードを瓶に詰めた）
g. Mary nursed her husband to health.（メアリは夫を看病して元気に回復させた）

さらに、基体の名詞が転換動詞の意味にどのように関わっているかにおいても、多様性が見られることも以前から指摘されてきた。Clark & Clark (1979) は 1300 以上の実例を集め、この観点から名詞転換動詞を丁寧に分類している。そのうち生産性が高いものとしては、以下のようなものが挙げられている：①もとの名詞が道具を表す (e.g. *hammer, pin, bus, mop, fax*) ②もとの名詞が動作主を表す (e.g. *nurse, butcher, jockey*) ③もとの名詞が位置変化の着点を表す (e.g. *bottle, shelve*) ④もとの名詞が状態変化をもたらす物材を表す (e.g. *carpet*,

water, fence)　⑤もとの名詞が状態変化の結果を表す (e.g. *powder, loop*)。影山 (1997) は、この分類に基づき、各タイプの転換動詞の意味を以下のような LCS で表している。[6]太字 Noun の部分に基体名詞の概念が代入され派生動詞の LCS が形成されているのである。これらは、英語の名詞から動詞への転換のうち生産性の高いスキーマを表しているものとも捉えられ、LCS は統語構造と規則的に対応するという語彙意味論の仮説に従えば，(10)で見たような転換動詞の多様な統語的性質も、これらの LCS によって予測ができることになる。

(11) a.　道具 (e.g. *hammer, mop*)　: [　]$_x$ ACT ON-[　]$_y$ BY-MEANS-OF-[**Noun**]$_z$
　　b.　動作主 (e.g. *mother, tutor*) : [　]$_x$ ACT ON-[　]$_y$ AS/LIKE-[**Noun**]$_z$
　　c.　位置 (e.g. *bottle, shelve*) : [　]$_x$ CAUSE [[　]$_y$ BECOME [[　]$_y$ BE AT-[**Noun**]$_z$]]
　　d.　物材 (e.g. *butter, wax*) : [　]$_x$ CAUSE [[　]$_y$ BECOME [[　]$_y$ BE WITH-[**Noun**]$_z$]]

しかし，これらの LCS が、英語の名詞から動詞への転換規則の記述として有効なものなのか、ある名詞を基体として転換動詞を形成する際にどの LCS が選ばれるかはいかに決定されるのか、さらには，同じ(11a)の LCS で表されるとしても，*hammer* なら「叩く」、*mop* なら「拭く」という行為を表すのだが、このような個々の動詞概念を特定する情報はいかにして得られるのか、といった問題について、影山の分析から答えは得られない。当然ここで注目すべきは、基体となる名詞の意味情報である。話者の直感をそのまま述べれば，*fax* は通信機器であり，*bus* は交通手段であるから前者は情報を誰かに送る意味で使い，後者はどこかに移動する意味で使うのである。あるいは、*hammer* は何かを叩くことが、*mop* は何かを拭いてきれいにすることが典型的使い方であるから、それらの行為を表す動詞として使うのである。

このような話者の直感を反映し、(11)のような LCS を名詞の意味から導くには、クオリア構造による記述が有効であることは明らかである。*fax* はテクストや画像を送るための機器、*mop* は床を拭くための掃除用具，*bottle* は物を保存する容器であるといった情報は，クオリア情報の目的役割に記されるものである。Clark & Clark (1979) では、生産性が高いものとして上記②で取り上げられている、基体が人を表す場合(cf. (10g))についても、*nurse* や *jockey* がどのような役割をもつかという情報は、目的役割に含まれるものと考えてよいだろう。このように英語の名詞転換動詞の多くは，基体名詞の目的役割に含まれる情報を利用して形成されていると考えられる。目的役割の情報は、通常事象構造によって表記されるので、その情報をそのまま転換動詞の LCS として利用すれば、(11)のような様々なスキーマが導かれることになる。したがって、(11)を名詞から動詞への転換の規則として記述する必要はなくなる。たとえば、名詞 *hammer, bottle* のクオリア構造が、それぞれ(12a)(13a)[7]だとすると、

---

[6] 影山(1997)では、③の位置変化動詞と⑤の状態変化動詞は同じ LCS のスキーマで表されている。

[7] 主体役割はこれらの名詞において重要な情報ではないので、省略している。

目的役割に記されている事象構造をそのまま転換動詞の意味構造として利用するプロセスを想定することによって、(12b)(13b)のような LCS が導かれる。[8]

(12) *hammer*

a. 形式役割：tool (x)
構成役割：consist _of (x, y: heavy metal head & handle)
目的役割：hit (e, w, z, with x)

b. [ ]$_x$ ACT$_{hitting}$ ON-[ ]$_y$ BY-MEANS-OF-[**HAMMER**]

(13) *bottle*

a. 形式役割：container_ of (x, y)
構成役割：consist _of (x, y)
目的役割：put _in (e, w, z, y)

b. [ ]$_x$ CAUSE [[ ]$_y$ BECOME [[ ]$_y$ BE IN-[**BOTTLE**]]]

このように英語の名詞から動詞への転換は、一般化できる規則としては、品詞の転換のみであって、どのような意味的・統語的性質をもつ動詞が形成されるかについては、基体名詞のクオリア構造の情報から予測するしかないのである。名詞のクオリア構造の中のどの役割の情報が利用されるかについては、由本(2007)でも論じたように、目的役割がもっとも多く、その理由の一つは、目的役割の情報は事象構造によって表されているため、動詞概念にシフトしやすいからであると考えられる。詳しくは由本(2007, 2011)を参照されたい。

4. おわりに

多くの先行研究では、語彙情報のうち意味素性、なかでも、クオリア構造で表される百科事典的情報は、語の多義性の説明や、共起する要素との関係において柔軟な解釈が許される現象を説明するのに有効な道具立てとして用いられてきた。語形成論においても、クオリア構造は、主に意味解釈に関わる情報として有用なものであることが論じられてきた。語形成論にクオリア構造による分析を取りいれた先駆的なものとしては、Johnston and Busa (1999)の［名詞＋名詞］型の語根複合語の研究がある。たとえば、*bread knife* において、*bread* は *knife* の目的役割をより特定する情報を与えており、*lemon juice* において、*lemon* は *juice* の主体役割をより特定しているという関係づけを見出せば、これら複合語の解釈が適切に導かれるというわけである。しかし、語形成論に目をむけると、意味素性やクオリア構造は、単に意味解釈に情報を提供するだけでなく、規則適用に関わる制約や規則が適用される基体の分布などを説明する重要な役割を果たすものである。さらに、3 節で見たよ

[8] 紛らわしいが、(12a)(13a)のクオリア構造内の変項として用いている記号と(12b)(13b)の LCS の変項につけている記号とは無関係である。

うに、基体のクオリア構造を示すことによってはじめて規則が明確化されるという語形成もある。この点において、クオリア構造は、単に文脈にそった意味解釈を導くための語用論的情報ではなく、まさに文法に関わる意味情報として扱われるべきものだと言えるのである。

参考文献

Clark, Eve and Herbert. Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs." *Language* 55, 767-811

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (eds.) (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Johnston, Michael and Federica Busa (1999) "Qualia Structure and the Compositional Interpretation of Compounds," in Viegas, Evelyne (ed.) *Breadth and Depth of Semantic Lexicons,* 167-187. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版, 東京.

影山太郎 (1997) 「名詞から動詞を作る」由本陽子との共著『語形成と概念構造』 研究社, 東京.

影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版, 東京.

Kennedy, Christopher (1999) *Projecting the Adjectives: The Syntax and Semantics of Gradability and Comparison*. Garland, New York.

Kennedy, Christopher and Louise McNally (2005) "Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates," *Language* 81, 345-381.

Lieber, Rochelle (1998) "The Suffix -*ize* in English: Implications for Morphology," in Lapointe, Steven, Diane Brentari and Patrick Farrell (eds.) *Morphology and Its Relation to Phonology and Syntax*, 12-33. CSLI Publications, Stanford.

Lieber, Rochelle (2010) *Introducing Morphology.* Cambridge University Press, Cambridge.

三原健一 (2009)「スケール構造から見る結果構文」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』141-170. ひつじ書房, 東京.

Williams, Edwin (1981) "Argument Structure and Morphology," *The Linguistic Review* 1, 81-114.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房, 東京.

由本陽子 (2007) 「名詞を基体とする動詞形成について」宮本陽一（編）『言語文化共同研究プロジェクト 2006: 自然言語への理論的アプローチ』91-100. 大阪大学言語文化研究科.

由本陽子 (2011) 「日英語におけるクオリア構造を利用した語形成」由本陽子（編）『言語文化共同研究プロジェクト 2010 : 自然言語への理論的アプローチ』 91-100. 大阪大学言語文化研究科.